ひと日

愛しきは雲の列を漂うもの
飛び立つ者の頬に陽光は留まり
苦笑をこぼれさせるこの暖かさ

グラウンド中央に空見上げる人はあり
旗竿に旗は掲げられてはいないが
かすかな風は流れている

鏡に写る背後に水面のように広がり
揺らめきとともにかすむ暮らし―――
そこに潜む時間こそ生の背中を押す者よ

ただ独りにて踊ることも
手を取り合って踊ることも
示されてあれ、身にまとう大気を

この一日を渡り切ることの難しさを知る者にこそ
あらゆる充足は呼び寄せられる
ああ、流れるものは生の営みのみにあらず

(2000.9.23)